

遺品に父への感謝つづつたメモ

高沢さん夫妻(仙台)

昨年3月11日に発生した東日本大震災。未曾有の苦難からもうすぐ1年を迎えるが、復興への道のりは険しく遠い。息子を失った父母、仮設住宅で暮らす女性、本県ボランティアの支援で再起を期す旅館の主人…。震災1年を機に、さまざまな人を訪ね「3・11」への思いを聞く。

(仙台支社・松田直樹)

突然この世を去った息子の遺品から小さなメモ帳が見つかった。「心にあるありがとうカード」と印刷された紙には父への思いがしたためられていた。

「おやじへ 今まで育ててくれて本当にありがとう。これからは俺が楽できるようにしてやるからもう少しだけ頑張るよ」

募る後悔の念

書いたのは高沢啓樹さん(享年32歳)。日付は東日本大震災で犠牲になる1カ月ほど前の2月1日だ。「なんで『生』で終わってるのかな。『生きて』と続けようとしたんだらうけど…。何よりも大事な宝物だ」。父・安志さん(62)仙台市宮城野区は目にはうつつと涙を浮かべて、

震災1年 それぞれの思い ①



津波で犠牲になった高沢啓樹さんの遺影を前に、思いを語る安志さん(中央)啓子さん夫妻。啓子さんの後ろにあるのは、啓樹さんが当時着ていたワイシャツ

＝仙台市宮城野区

息子から届いた「宝物」

1年前を振り返る。啓樹さんは生前、本県や宮城などパチンコ店と飲食店を営む「ベガスベガス」に勤務。鶴岡や酒田を経て、名

取市の「名取店」で働いていた。夕方からの勤務だったが、地震発生を受け、自ら進んで店を営む「ベガスベガス」に

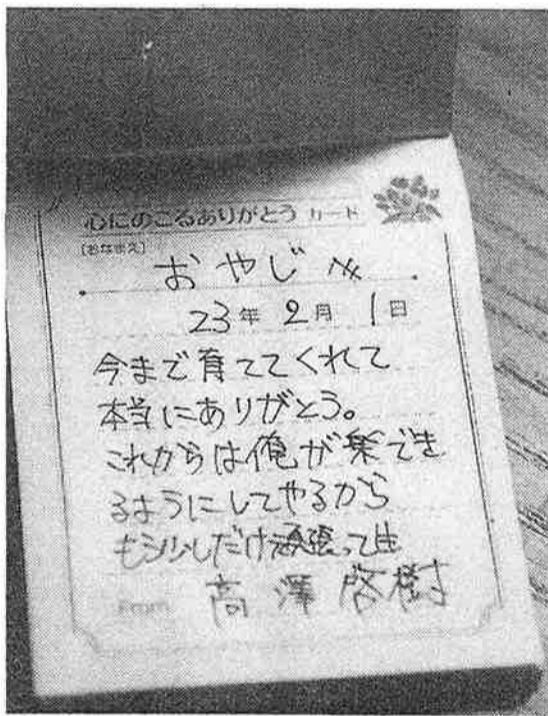
てあげようと、海岸近くの閑静な住宅街に引っ越した。3・11以降、啓樹さんの枕元には、啓樹さんが2度、夢に出てきた。「冷蔵庫の隣に立っていた。あつと思ったら

ら、この三つを厳しく教えてきた。約束を守らなかつたときには玄関先に座らせて考えさせた。もう少し優しくしてあげよう。息子の死に直面し、後悔の念が心を埋めた。母・啓子さん(63)にとつて一番楽しかった思い出は、家族4人で毎年、年末年始を過ごした瀬見温泉だ。「2泊3日の小旅行。啓樹が熱を出し

すぐ消えちゃった。まだ、どこかできつと元気に生きていた。そう思わないとやっていけない。だから「夢で会いたい」とは思わない」啓樹さんが発見された時に着ていたワイシャツとスボンとジャンパーはクリーニングに出した。「泥まみれであちこち裂けていたけど、ひよっこり帰ってきたらいつでも着られるように」今も遺影とともに仏間に飾ってある。勤務先の研修で書いた作文には両親への感謝の気持ちが素直に記されていた。「今まで自分は親がまだ生きていますから」といった感じで両親の行為は全て当然の事だと思っ

天国で旅行を

俺たちの子に生まれて幸せだったのだろうか。厳しすぎただろうか。何度も考えた。でも、この作文を読んで「育て方は間違っていないな」と分かった。最後まで、人のために精いっぱい生きてくれた」作文は「今年は必ず両親に旅行をプレゼントします」という言葉で締めくくられていた。啓樹さんは約束を果たせないまま旅立った。しかし、安志さんは「いつか天国からきつとプレゼントしてくれる。それを楽しみに待っている。そしてこう加えた。「自分たちが亡くなったら天国で一緒に旅行したいな」



啓樹さんが生前、父に宛てたメモ。遺品整理中に見つかった